

都道府県・ 指定都市番号	34	都道府県・ 指定都市名	広島県	研究課題番号・校種名	2 (4) 高等学校
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (児童・生徒数)	広島県立忠海高等学校 (204人)				
所在地 (電話番号)	〒729-2314 広島県竹原市忠海床浦 4-4-1 (0846-26-0800)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.tadanoumi-h.hiroshima-c.ed.jp				
研究のキーワード	「地域」「コミュニケーション」「つながり」「協働」「主体性」				
研究結果のポイント	<p>○総合的な学習の時間を中心に, 特に第1学年において地元忠海地域をフィールドとする課題発見・解決型の探究活動を展開することで, 自分の考えに, 他者の意見を取り入れようとする意識が高まるとともに, 全学年においても, グループ活動の充実により, 「他者と協力する態度」が育まれた。</p> <p>○研究活動に取り組んだことにより, 生徒から, S D G s を意識した表現や提言が出され, 課題に対して自発的・能動的に取り組む姿勢が見られるようになった。</p> <p>●「つながりを尊重する態度」については, 全学年において高まりは見られなかった。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

持続可能な社会の形成者としての認識と地域活性化に係る実践力の育成
 ～体系的で系統的な E S D の推進を通して～

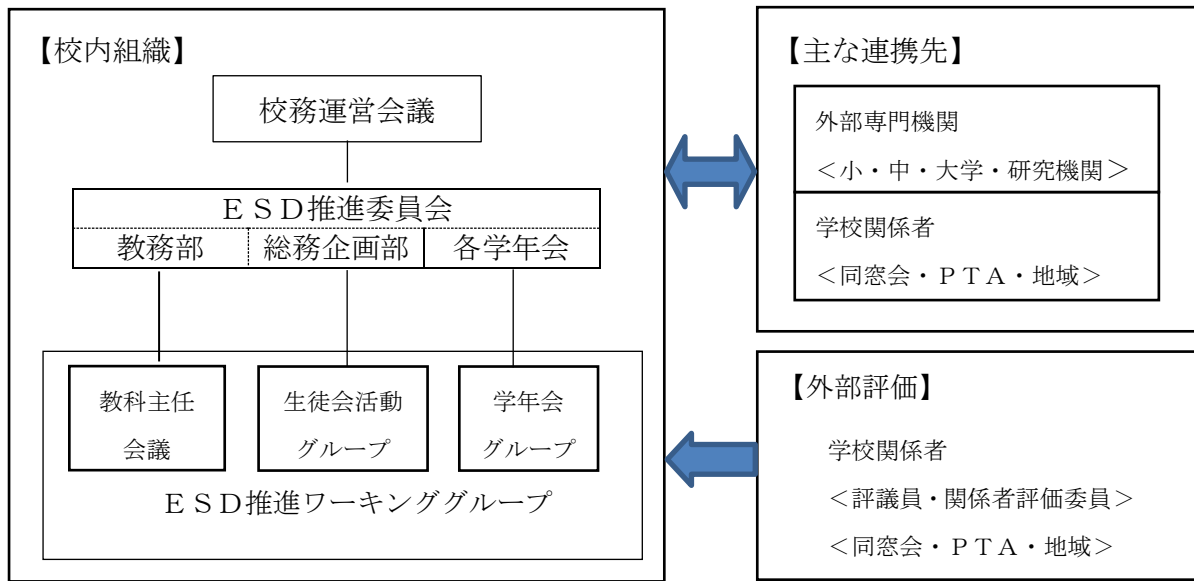
(2) 研究主題設定の理由

本校は, 瀬戸内沿岸の豊かな自然環境に恵まれた場所に立地し, 創立 121 年の, 広島県下でも 3 番目の歴史を有する伝統校である。その一方で, 近年は地域の過疎化や少子高齢化が進み, 1 学年 2 クラスの小規模校となっている。これまで, 小規模校ならではの弾力的かつ全校的な様々の取組を推進し, 平成 21 年度からは環境省の「エコアクション 21」の認証・登録を受けるなど, 環境マネジメントに積極的に取り組んできた。また, ボランティアや地域活性化に係る諸活動にも多数の生徒が参加し, 「地域から応援され, 地域を応援する学校」として信頼を得てきた。さらに, 平成 28 年度からの 2 年間は文部科学省の人権教育研究指定校として, 「学習者の対話と協働を基本とする授業づくり及び学校行事」をテーマに, 正しい知識及び人権感覚, 価値的態度等の育成を目指す取組を展開した。これらの取組が, 積極的な対話や他者承認につながる教科指導の実践と, 教員の教科指導力の向上及び生徒自身の協調性や思考力等の資質・能力の向上につながったと考える。

しかし, 各教科間連携や, 教科と総合的な学習の時間あるいは特別活動等との系統的な関連付け, また本校生徒に育成したい資質・能力の明確化及び評価が不十分であったため, 生徒自身の主体的な学びの在り方や, 広い視野をもって課題を多面的に認識する力及び主体的な実践力の育成には, 更なる検討と工夫改善が必要な状況であった。

上記の本校の実態やこれまでの実践を踏まえ、E S Dの視点を取り入れて、地域における諸課題を把握してその解決に向けて貢献する生徒の育成を図りたい。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成30年度	4月	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画の職員間での共有 1学年「オリエンテーション合宿」での大久野島探究及びポスターセッション エコ委員会によるエコアクション年間計画の提示と活動の開始
	5月	<ul style="list-style-type: none"> E S Dワーキンググループ会議による年間計画の調整
	6月	<ul style="list-style-type: none"> 国立教育政策研究所教育課程調査官の訪問、講話 文化祭における、1学年代表グループによる大久野島探究成果発表 E S D校内研修会（講師：広島大学大学院教育学研究科 由井義通教授）
	7月	<ul style="list-style-type: none"> 生徒意識調査及び分析① 「大久野島探検マップ（日本語版及び外国語版）」の作成と地元地域への配付 大久野島毒ガス障害死没者慰霊碑の参拝及び周辺清掃（全校ボランティア）
	9月	<ul style="list-style-type: none"> S D G s についての学習
	11月	<ul style="list-style-type: none"> 2学年海外研修旅行に向けての事前学習（台湾の地理・歴史や日本との関係等） 1学年地元地域の事業所等との連携（取材活動） 2学年海外研修旅行での現地校との文化交流 先進校視察（神戸大学附属中等教育学校）
	12月	<ul style="list-style-type: none"> 公開研究授業（大久野島を主な舞台とする英語劇創作の取組）及び研究協議会
	2月	<ul style="list-style-type: none"> 生徒意識調査及び分析②
	3月	<ul style="list-style-type: none"> 学習成果発表会における1年間の成果発表及び検証 生徒意識調査及び分析③ 初年度の取組に係る自己評価並びに学校関係者及び外部評価、次年度研究計画等の見直し

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ア E S Dで育成したい能力・態度として、「コミュニケーションを行う力」「つながりを尊重する態度」「他者と協力する態度」の三つを設定し、教科や総合的な学習の時間、特別活動等において、その育成のための具体的方略を検討し、その効果を検証する。

イ 「地域」をテーマに活動することにより、持続可能な社会の形成者として地域活性化に係る実践力を高める効果について検証する。

(2) 具体的な研究活動

ア 第1学年

主に総合的な学習の時間において、自然環境や歴史においても地元地域の財産である大久野島を扱うこと、また地元忠海地域の事業所等と連携することにより、持続可能な社会の形成者として地域活性化に係る実践につながるよう努めるとともに、地域課題の発見及びその解決方法について生徒同士がグループで調べたり話し合ったり取材活動に取り組んだりする中で、「コミュニケーションを行う力」「つながりを尊重する態度」「他者と協力する態度」の育成に努めた。

イ 第2学年

海外研修旅行における台湾の現地校との文化交流や、外国語「発展コミュニケーション」における「訪日外国人を大久野島に案内する」というテーマでの英語劇創作の取組を通じて、国際社会において「コミュニケーションを行う力」や、国境を超えての人間同士の「つながりを尊重する態度」の育成に努めた。

ウ 全学年

2030年までに達成すべき17の目標として挙げられているSDGsについて、「地域貢献」「平和」「環境」の面から学習し、地元地域での活動に参加させた。

エ 教員

外部講師の講話や公開研究授業における研究協議会等での協議、先進校視察を通して、ESDの観点に基づいた本校生徒の能力・態度の育成へ向けての方略について再検討し、今後の指導の展開について考察した。

(3) PDCAサイクルへの取組について

ア 質問紙調査の実施

生徒の意識調査を、22項目にわたる質問項目から成る質問紙により、各学期末に実施した。なお、質問項目は「教育課程研究指定校事業（ESD、論理的思考、カリキュラム・マネジメント）における検証改善サイクルの実施について」に記載されたものに加え、国立教育政策研究所教育課程研究センターESDリーフレット「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」で紹介されている「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の具体例を基に作成した。

イ 質問紙調査の結果と分析 ～1学期末と2学期末の調査結果の比較から見られる特徴～

(ア) 第1学年では、「他者の意見を踏まえてより良い意見を考えている」「身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている」といった「他者と協力する態度」に関わる質問項目において大幅な数値の上昇が見られる。これは、グループ活動などを通じて新しい人間関係が年度当初よりも成熟したこと、総合的な学習の時間における年間を通じた活動を経験したことが影響していると考えられる。

(イ) 第2学年では、「仲間を励ましながらか、チームで活動している」という「他者と協力する態度」に関わる質問項目において大幅な数値の上昇が見られる。これは、研修旅行をはじめとした学年・クラスでの活動の経験が影響していると考えられる。

(ウ) 第3学年では、「身の回りの出来事を様々な側面や立場から考えている」「自分の考えに、他者の意見を取り入れている」という質問項目において大幅な数値の上昇が見られる。これは、自らの進路決定をする中で他者からの意見を聞く場面が増えたことが影響していると考えられる。

(エ) 全学年を通して、「地域のことに進んで参加している」という質問項目において、ボラ

ンティア参加の総数自体には大きな変化が見られないにもかかわらず、否定的な変化が見られる。これは、本校を取り巻く地域が7月に豪雨災害を被災しており、社会参画への意識が高まり、生徒が自分自身の行動に厳しい判断をするように変化したと考えられる。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

○総合的な学習の時間を中心に、特に第1学年において地元忠海地域をフィールドとする課題発見・解決型の探究活動を展開することで、「コミュニケーションを行う力」「つながりを尊重する態度」「他者と協力する態度」の育成を図る目的で活動を行うことができた。そのうち、「他者の意見を踏まえてより良い意見を考える」など「他者と協力する態度」に関しては、意識の高まりが見られた。

○研究活動に取り組んだことにより、生徒からSDGsを意識した表現や提言が出され、課題に対して自発的・能動的に取り組む姿勢が見られるようになった。

●「つながりを尊重する態度」については生徒の意識の高まりが見られなかった。生徒一人一人が各研究活動を自分事として取り組めるよう、各活動に当たっての事前指導及び次につながるフィードバック・事後指導を充実させて、主体的な活動に繋げていく必要がある。

●ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の検討が7つすべてに至らなかった。

●生徒の変容を十分に把握できていなかった。

●ESDの視点に立った、教科や総合的な学習、特別活動等との系統的な関連付けが一部にとどまり、全体のものになっていなかった。

●学年会や教科会のレベルでの研究活動の推進にとどまり、ESD組織として学校全体として取り組むという点においては十分とは言えない。

4 今後の取組

(1) 1年次で行った「大久野島」を中心にした「地域」の研究を、2年次の海外研修を素材とした「国際化」の研究、3年次の「進路」の研究につなげて、空間的・時間的な広がりを生徒に意識させる取組を行い、持続可能な社会の形成者としてESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成の方法を検討する。

(2) 生徒が研究活動を自分事として取り組み、課題の発見が日常の行動にまでつながるようにするため、身近な地域をテーマに活動することにより地域活性化に係る実践力を高める、という研究の原点に戻り、探究活動を一連のまとまりとして計画し実施する。

(3) 生徒の変容を把握する方法として、研究活動から見出された課題を生徒に記録させ振り返りをさせる機会を計画的に取り入れ、成果物を分析し変容を検証する。

(4) 教員の各教科での系統的な取組や教科間での横断的な取組が有効につながるよう、シラバスの構成の見直しや、育成する態度・能力を落とし込んだカリキュラムマップを作成する。

(5) ESD推進体制を見直し、各部署の活動を統括できるよう、少人数のチームで構成する推進ワーキンググループを組織する取組を行うことにより、ESDの組織的取組の在り方を検討する。